



「やかまし村の子どもたち」



ASTRID
LINDGREN

アストリッド・リンドグレン

1907-2002

スウェーデンのスモーランド地方、ヴィンメルビーに生まれ、小さな農場で4人兄弟の長女として子ども時代を過ごす。『長くつ下のピッピ』『やかまし村の子どもたち』『名探偵カッレくん』など、世界中で愛されている物語は130作品以上。2002年には、児童青少年文学賞である「アストリッド・リンドグレン記念文学賞」が創設された。

『長くつ下のピッピ』ならわかるけれど、『やかまし村』が好きなの？

スウェーデンの田舎の日常が、日本人にそんなに面白いかしら？——

子どもの頃にやかまし村シリーズが大好きだったと言った友人に、あるスウェーデン人がそう答えたといいます。それほどやかまし村シリーズに描かれているのは、スウェーデン人にとってごくあたりまえの、ありふれた農村風景なのでしょう。これといった大事件が起こるわけでもなく、ピッピのように破天荒な行動をする子がいるわけでもない「やかまし村」の日常……しかし、子どもたちはこの物語をどれほど愛し、心躍らせながら読みすすめていくことか。四季折々の行事や出来事、次々と生まれる楽しい遊びは、リンドグレンによってこの上なく温かく、優しく、にぎやかに描かれ、大人になって読み返した時でもなお、自分がやかまし村の一員になったかのような、忘れていた何かを見つけたような

そんな気持ちにしてくれます。

やかまし村と呼ばれる小さな村に家が3軒、子どもが6人……リンドグレンはこのやかまし村シリーズに、自身の子ども時代を描きました。「私はいつだってヴィンメルビー農場の娘」と、リンドグレンは晩年になっても語っています。物語の主人公であるリーサの兄ラッセは、リンドグレンの兄であるグンナルがモデルになっていますし、リンドグレンが育ったヴィンメルビーは、隣の大きな町として描かれています。干し草の中での遊び、収穫の日のエピソード、魔女ごっこ……そして見守ってくれる両親の存在の温かさなど、リンドグレンは「遊んで、遊んで、遊び死にしまったのが不思議なくらい」と後に振り返るほど、幸福だった自分の子ども時代を、そのまま物語にしました。

やかまし村シリーズは、1986年に「マイ・ライフ・アス・ア・ドッグ」

のラッセ・ハルストレム監督により、リンドグレン自身の脚本で映画化されますが、息を飲むほど美しいスウェーデンの自然や、子どもたちの輝く笑顔にどこか懐かしい気持ちになるのは、映像を観るまでもなく、物語を読んだ時点で既に、その美しさや、生き生きと輝く子どもたちの日々を、充分に感じていたからだといえます。それほど、リンドグレンの言葉には、想像力を掻き立てる力があり、息遣いがあり、体温があります。

リンドグレンが愛してやまなかったスウェーデンの自然、子どもたちの遊び……やかまし村シリーズは、読むごとにリンドグレンの世界が、そしてスウェーデンという国が、身近に感じられる作品です。

※アストリッド・リンドグレン作 大塚勇三訳「やかまし村の子どもたち」「やかまし村の春・夏・秋冬」「やかまし村はいつもにぎやか」(岩波書店刊)

監修 齋藤惇夫

作家・児童文学者。福音館書店の専務取締役(編集責任者)として子どもの本の編集に携わり、2000年に退社、創作活動に専念。著書に『グリックの冒険』(岩波書店・日本児童文学者協会新人賞受賞)、『冒険者たち』(岩波書店・国際アンデルセン賞優良作品賞受賞)、『ガンバとカワウソの冒険』(岩波書店・野間児童文芸賞、国際アンデルセン賞優良作品賞受賞)、『哲夫の春休み』(岩波書店)などがある。

PRESENT

リンドグレンの本をプレゼントします。詳しくはP.26をご覧ください。